

めっちゃ滅茶効いてるやんけ！

インフルエンザワクチンの話である。くりかえすが、ワクチンを打ったからといって、インフルエンザに絶対罹らないものでもない。「罹らない」ようにするには、米国ですでに使用されている鼻の中にスプレーをするワクチンの方が有効である。その理由を少し詳しく述べる。

ワクチンを打つと、およそ2週間くらいで血液中に抗体ができる。「抗体」は「免疫グロブリン」と同義語である。免疫グロブリンには5種類ある。これを **Immunoglobulin** の略で **Ig** と表現する。血液中には **IgG** が最も多く、**IgA**、**IgM**、**IgD**、そして **IgE** がある。**IgE** はとくにアレルギーに関与するもので、花粉症がその代表的なものである。・・・話が込み入ってくるが、花粉が体内に侵入すると、**IgE** 2分子がくっついて、ヒスタミンやセロトニンなど有害物質を放出する。これがくしゃみ、鼻水、鼻づまりの原因になる。「感作療法」とは、花粉から抽出した抗原をくりかえし打つことにより **IgG** を産生し、花粉が侵入しても **IgE** がくっつく前に **IgG** がくっついて有害物質を放出しないようにすることである。だから週に1回とか2週に1回とか持続的に抗原を注射しなければならない。これがまた邪魔臭い。・・・それはともかく、血液中にいくら免疫グロブリンが大量に存在していても、インフルエンザ・ウィルスが体内に侵入してきたときには、役に立たない。鼻汁や咽頭粘液の中に免疫グロブリンが存在しないと感染してしまう。このときの抗体の主役は **IgA** である。体液中に **IgA** が大量に存在するようになればインフルエンザに罹らなくなる。だから、「注射」ではかなり困難な相談である。

友人の一人に奥野という男がいる。ワクチンの大家であり世界中に名前が知られている。ワクチンのことや微生物についてわからないことがあれば彼に教えてもらう。四国微研の所長であるが、一度テレビに出演して「罹らない事は無いが、罹っても軽症ですむ」と言っていた。・・・あるとき、ワクチンを注射したあと「揉んだ方がいいのか、そのままにするのがいいのか？」と尋ねたら、さあな、どっちでもええのんとちゃうか、という返事であった。「なんやったら、自分で実験して、どちらがいいか、確かめてみたらどうや」「アホ！そんなことができるかあ」で、昨年までは注射後揉んでいた。ところが、厚生省の方針で、すべてのインフルエンザ・ワクチンにアジュバントを混ぜることになった。アジュバントとは、抗体を産生しやすくする物質である。そのため、ワクチンの中の抗原と同じ場所にいなければ、役に立たない。結果、**注射後、揉まないように**しなければならなくなった。

ある年、インフルエンザの診断をした患者数が 34 人で、うちワクチンを打

った患者が4人だったと報告したら、表題のめっちゃ減茶・・・である。だからワクチンを打ち続けている。そして、その後もインフルエンザにかかった人の10人中1人か2人だけがワクチンを打っていたのみで、残りはワクチンを打たなかった人である。

なお、当初はインフルエンザと診断した人には、5日間の隔離のための休養期間が望ましい、と書いて渡していた。しかし、3日目くらいには元気になる人が多く、3日間の隔離ですませていたが、当局の通達により、今後は「**5日間の隔離**」が必要と一筆書くようにする。5日間隔離すればまず問題はない(他人に感染させる可能性はほとんどない)から、「仕事(学校)に復帰してもいい」などと書く必要はなくなる。もうひとつ、タミフルの耐性の問題があるが、その場合には3日目くらいには効かないと言ってくる。だから、**職場復帰可の文章はいらなし、書く必要もない。**

今年もノロウイルスが大流行した。6年前にもノロウイルスが大流行したが、このとき、奥野に尋ねると「インフルエンザが流行しなかった年は一度もない！」と断言した。通常の流行期間からおよそ1ヵ月半から2ヵ月半遅れてインフルエンザの流行が発生した。

ウイルスというのは、単独で空中に浮遊しているものではない。必ずと言っていいほど埃などに付着あるいは寄生しているものである。仮にインフルエンザウイルスとノロウイルスが同時に付着しているとすれば、ノロウイルスの方が強いのだろう。

ノロウイルスの名称について、ときにテレビなどの媒体でも「ノロですか」などと呼ぶ。すると野呂さんが嫌がる。当たり前で、せめてNHKだけでもノーウォークウイルス(NORWALK VIRUS)と呼ぶべきではないか。1000人単位で患者が発生している。集団感染や院内感染が多発しているし、死亡する人もでてくる。特効薬がないから性質が悪い。ウイルスの数が少なくても発症する。・・・院内感染は、まあ、恥ずかしいことのひとつだろう。職員が患者に広げている可能性も高い。手洗いの不備や処置の不手際である。

2013.01.10..